クルグズ共和国における楽器改良
――ソ連時代から現在にいたるまで――

ウメトバエワ・カリマン

(0) はじめに

1928年に初めてクルグズ[1]の音楽と楽器を研究・調査した人物はロシアから来たザタエヴィチ・アレクサンドル[2]である。当時の資料の中で彼は「クルグズ人には三つの楽器しかない。それはコムズ、クル・クヤクとテミル・コムズである。チョールとスブズグを弾ける人もいるが、それはクルグズの特有なものではなく、近隣の民族から伝わったものである」と述べている[3]。しかし、現在では演奏されている楽器が十種類以上もあり、そのなかにはソビエト社会主義共和国連邦時代(1917-1991年)に改良[4]されたものも含まれている。そして、その音楽も大幅に変化している。

本研究の目的は、ザタエヴィチの記録によるコムズ(komuz, комуз)、クル・クヤク(kyl kyyak, кыл кыяк)、テミル・コムズ(temir komuz, темир комуз)などと、現在クルグズで演奏されている楽器群との比較考察を行い、楽器の構造や、奏法、製作方法を中心にそれらの変遷について検討することである。さらに、筆者が2011～15年にクルグズの首都、ビシケクで行ったインタビュー調査の結果を報告する。被調査者の一人は、ソ連時代にウズベキスタンの首都、タシケント楽器工場で研修を受けたことのあるアイドゥラリエフ・スラガン(Aidyraliev Suragan, Айдыралиев Сураган)(1956-)という楽器製作者である。今回のインタビューから、彼によってソ連崩壊前後の時期に縦笛のチョール(choor, чоор)、オカリナに似たチョポ・チョール(chopo choor, чопо чоор)、横笛のスブズグ(sybyzgy, сыбызгы)が復活され、改良されたことが明らかになった。そして、その改良楽器による民族楽器アンサンブル「テンギル・トー」(Tengir too, Теңир тоо)[5]のように、新しい国民国家の文化的象徴として、内外の公演や音楽教育の現場で活躍しているものもあることが明らかになった。

結論部では、ソ連崩壊前後の時代から廃れた楽器の復活と改良、それに伴って現在伝統音楽が復興している要因について考察を行う。その背景には社会で起きている様々な出来事が間接的に深い影響を与えていることが予想できる。2005年と2010年の政治革命後の現在でも、厳しい状況を乗り越えなければならないクルグズの国民にとって、民族音楽は、民族意識を高揚させ、国民を団結させる力を持っており、団結の象徴であることを指摘する。

(1)　コムズ

(1-1) コムズの紹介

遊牧民であったクルグズ人は馬や羊など家畜とともに生活してきた。そのため放牧地が痩せると、一つの場所から他の所へと移動していった。平地で遊牧をするカザフ人やトルクメン人は水平方向に移動していたが、クルグズ人は山の麓から頂上まで垂直方向に移動し、遊牧生活を営んでいたという[6]。また食材を得るために狩りが大事だった。このような厳しい自然と生活が、クルグズの音楽と楽器に大きな影響を与えてきたといえるだろう。頻繁に移動する遊牧生活では、物を持ち運び易くするために、なるべく軽く、小さくする。コムズもまた、口琴やクル・クヤク（二弦楽器）といった他のクルグズの楽器と同様に、軽くて持ち運びしやすい形状である。険しい山岳地帯の暮らしでは人々の交流が困難だったため、音楽の演奏は少人数で行われるのが普通であった。楽器の奏法は即興的であり、独奏で行われる場合がほとんどであった。また音量がそこまで大きくないため、個人で楽しむために演奏をすることもあったという[7]。

コムズはクルグズを代表する国民的な楽器であり、船を漕ぐオールのような形状をしている。楽器の名称は二つあり、一つはよく知られているコムズ、もう一つは「チェルテメック」（chertmek, чертмек）であり、チェルト（chert, черт）はクルグズ語で「パチッと鳴らす、叩く」という意味になる。後者は専らクルグズ南部一帯で用いられる名称で、外国ではほとんど知られていない。コムズの素材にはアンズの木の幹が適し、楽器の胴、棹、頭部(転軫)はアンズの木を彫り抜いて作られる。共鳴板にはエゾマツが使用される場合が多い。弦は三本で、元来は乾燥させた羊の腸が使われていたが、ソ連時代にはナイロン製の釣り糸で代用されるようになり、ソ連崩壊後は靴を仕立てるためのナイロン製の縒り糸が使用されている。かつてコムズは即興で独奏演奏が主であったが、現在ではソロの他に、楽器アンサンブルやオーケストラ、歌の伴奏楽器としても用いられる。

コムズは中央の弦が高い音に調律される場合が多い。例えば、e-a-e、d-a-d、e-a-d、d-a-eがよく使われている調弦法である。

コムズの演奏技法の特徴的な要素として、手の華やかなパフォーマンスが挙げられる。演奏家は曲を演奏する前に曲の由来、意味等を話す。例えばオゴンバエフ・アタイ（Ogonbaev Atai, Огонбаев Атай）（1900-1949）作曲の《アク・タマック・コク・タマック[8]》（Ak tamak kök tamak, Ак тамак көк тамак）では、「アク・タマックとコク・タマックは、西クルグズに住むつがいの鳥である。妻のアク・タマックは夫のコク・タマックに『南クルグズに引越しをしましょう。南クルグズは果物と野菜が多く、暖かい地域ですよ』と言う。コク・タマックは『ここはタラスで偉大なマナス英雄が生まれた場所だから、クルグズ人にとっては神聖なところだ。ここから引越ししないぞ』と答える。アク・タマックは『それでは、歌を歌っ

て、どちらが上手か勝負しましょう。そして、勝った方に従いましょう』と言って、二羽の鳥が歌い始める」といった曲の内容を話してから、曲を始める。演奏家はコムズを演奏しながら、右手（弦を弾く手）で鳥の翼を模して羽ばたくような動きをしたり、肩や頭に楽器をのせたりする。こうした所作はコムズに特有のものであり、クルグズ語ではコル・オイノトゥモ（kol oinotmo, кол ойнотмо）と呼ばれ、「手で遊ぶ」という意味になる。

コル・オイノトゥモの由来についての定説はない。筆者は、必要最低限の必需品を携えて遊牧生活を営んでいたかつてのクルグズ人は、厳しい自然環境のなかで玩具などの娯楽品をほとんど持たなかったために、こうしたパフォーマンスが発達したのではないかと考えている。

（1-2）コムズの変化

2011年から2015年に筆者がクルグズの首都ビシケクでインタビュー調査を行った結果の一つは、コムズが人気を集めていることであった。しかし、このコムズはソ連成立以前のコムズと全く同じものではない。【表１】はザタエヴィチが1934年に記録したコムズ[9]❶のサイズと現在のコムズ❷のサイズを比較したものである。❶は、コムズ奏者兼アクン[10]であったサティルガノフ・トクトグル（Satylganov Toktogul, Сатылганов Токтогул）（1864-1933）が使っていたコムズである。

【表１】1934年と2012年に製作されたコムズとの比較

	❶1934年に記録されたコムズ	❷2012年製作のコムズ	差（❷－❶）
①　楽器の全長	86cm	89.5cm	＋3.5cm
②　表面の胴の一番広い箇所の横幅	15cm	21.3cm	＋6.3cm
③　棹（首）の長さ	35cm	35cm	0cm
④　棹の付け根の一番広い箇所	5cm	4cm	-1cm
⑤　棹の一番細い箇所	2.5cm	2.5cm	0cm
⑥　棹の上の箇所から駒まで	58cm	64.5cm	＋6.5cm

【写真１】中、左から１番目がソ連設立以前のコムズ、３番目が現在使われているコムズである。

【写真１】[11]さまざまな時代に作られたコムズ

【表１】の二つのコムズのサイズを比較してみると、①の全長は現在のコムズの方が約3.5cm大きくなっており、③の棹の長さはほとんど変わっていないが、⑥の胴は長くなっていることがわかる。胴の長さだけではなく、②の胴の表面の板も6.3cmほど広くなっている。おそらく大型化したのは、コムズの音量を大きくするためであろう。

また、コムズのサイズだけではなく、楽器の素材や製作方法も変化している。三人の楽器製作者を例に挙げて示す。

ビシケクに住むウラリエフ・ナマズベック(Uraliev Namazbek, Уралиев Намазбек)(1956-)は、クルグズで最高の技術を持つコムズの製作者として知られており、多くの演奏家たちが彼に楽器の製作を依頼する。ウラリエフはコムズの製作を祖父から習ったという[12]。コムズは、１本のアンズの木をくり貫いて作るのが一般的であり、ウラリエフもその作り方でコムズを製作している。

しかし、興味深いことに、ウラリエフ以外の二人のコムズ製作者は、１本の木ではなく、楽器の胴とネックとを別々に作り、また胴の裏側と表面とを別々に作っている。クルグズ語では、この作り方をクラマ・コムズ（kurama komuz, курама комуз)、あるいはチャプタマ・コムズ（chaptama komuz, чаптама комуз）と呼ぶ。日本語で「組み立て式コムズ」という意味になる。現在、組み立て式でコムズを作っている職人の一人は、クルグズのイシククル州セミョノフカ村に住むケンチンバエフ・オロゾバイ（Kenchinbaev Orozobai, Кенчинбаев Орозобай）(1943-)で、三人の職人の中ではベテランである。もう一人は、ビシケクに楽器の

工房を持っているアイドゥラリエフ・スラガンである。二人の話では、コムズを１本の木で作ることもできるが、それは合理的ではないという。組み立て式のコムズは音も良く、使う木材の量が少なくてすみ、出るゴミも少ない。腐った木でなければ、１本の木からくり貫けるコムズは約８本、クラマ・コムズなら約50本できるという。

2012年のインタビューの結果では、2007年から伝統音楽と伝統楽器の人気が徐々に高まっており、特に2009年からその傾向が強まってきていることが分かった。伝統楽器の中でも特にコムズは注目を集め、需要が高いため、コムズ製作者はクラマ・コムズの方をより多く作り始めている。

2011年に筆者が若手コムズ奏者であるジュマバエフ・ルスラン（Jumabaev　Ruslan, Жумабаев Руслан）（1973-）にインタビューをした際、彼は、コムズは完成された楽器であり、これから先コムズの改良は必要がないという意見を述べた。しかし、筆者が同年にウラリエフの楽器工房を訪ねたとき、彼は、一般的に使われているコムズより棹が３～４cmほど長い新しいコムズを実験的に作っていた。筆者がこのコムズを弾いてみたところ、普通のコムズと大きな違いは感じなかったが、ウラリエフの話では、このコムズの棹は長くなっているため、棹を押さえる指を普通のコムズより伸ばさなくてはならず、長い時間このコムズで演奏すると、手と指が疲れてしまうという。先に挙げた【表１】で③棹の長さについては、ザタエヴィチが記録したコムズと現在のコムズに変化はなかった。それは、コムズ奏者の感覚では、このような棹の長さが特にコムズの演奏特徴であるパフォーマンス的な動きに適切であったためと考えられる。しかし、なぜウラリエフは棹を長くしたのだろうか。ウラリエフだけではなく、楽器製作者らは、より音が良く、楽器の製作時間は短く、材料もより合理的に使ってコムズを作りたいと思っていることがうかがえる。したがって、コムズの「変化」はこれからも続くのではないかと推測できる。

(2)　クル・クヤク

ザタエヴィチはコムズと同じようにクル・クヤクについても記述している。ザタエヴィチがサイズを計ったクル・クヤクは、ボゴチノフ・ジョロイ（Bogochinov　Joloi, Богочинов Жолой）（1888-1934）というクル・クヤク奏者の楽器であった。現在のクル・クヤクと比較してみると次の通りになる[13]。

【表２】20世紀初め頃に使用されていたクル・クヤクと2012年に製作されたクル・クヤクとの比較

	❶20世紀初め頃に使用されていたクル・クヤク	❷2012年に製作されたクル・クヤク	差（❷－❶）
①楽器の全長	56cm	70cm	＋14cm
②棹の上の箇所から駒まで	36cm	41.5cm	＋5.5cm
③表面の胴の一番広い箇所の横幅	12cm	19.5cm	＋7.5cm
④弓の毛の長さ	66cm	61cm	-5cm

【表２】を見ると、クル･クヤクもコムズと同様に楽器そのものが大きくなっている。ザタエヴィチが計ったものと比較すると、2012年に製作された弓の毛の長さは５cmほど短くなっている。

【写真２】クル・クヤク[14]

かつてクル・クヤクは、コムズと同じように、胴は１本のアンズの木からくり貫いて作られ、表面にラクダの皮が使われていた。

クル・クヤクはソ連時代に廃れて演奏されなくなった楽器の一つであった。2012年の調査では、音質の良いクル･クヤクを作る楽器製作者はビシケクに住むベリクバエフ･マラトベック（Berikbaev Maratbek, Берикбаев Маратбек）（1969-）ただ一人だということがわかった。彼は、1995年にクル・クヤク製作者コンクールでグラン・プリを取り、それ以来さまざまなところからクル・クヤク製作を依頼されている。ベリクバエフがクル・クヤクを製作するよ

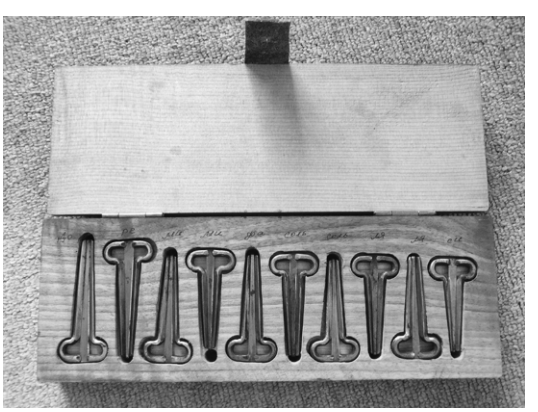
うになったのは、クル・クヤク奏者チティルバエフとの出会いが大きかった。

チティルバエフ・バクティベック（Chytyrbaev Baktybek, Чытырбаев Бактыбек）（1962-）は1995年のクル・クヤク製作者コンクールの主催者であり、現在クルグズで代表的なクル・クヤク奏者である。クル・クヤクが復活したのは彼の功績だと言われている。先に述べたように、ベリクバエフがグラン・プリを取ったこのコンクールをきっかけにクルグズで伝統型クル・クヤクの製作者が現われ、クル・クヤク復活の一つの出発点となったとも言える。しかし、その後チティルバエフの事業が破綻したため、1995年に行われたクル・クヤク製作者楽器コンクールが唯一の貴重な大会になってしまった。

(3) テミル・コムズ

ザタエヴィチは、テミル・コムズについて、楽器全長が6cmで、音量が小さいため、舞台ではなく演奏家の近くに来ないと聞こえない楽器であると述べている[15]。ザタエヴィチがクルグズで調査を行った時代には、テミル・コムズの種類は一つしかなかった。しかし、現在のテミル・コムズは、さまざまな音に調律された物がある。【写真3】に示したテミル・コムズ属は、アンサンブルのために製作された楽器であり、一個一個のテミル・コムズが決まった音に調律されている。形状の最も大きい楽器から小さい楽器まで（左から右へ）、c、d、e、e、f、g、g、a、a、bの順番に並んでいる。e、gとaが二つずつ製作されている理由は、その音の楽器が最も演奏されるため、予備品である。ザタエヴィチが1930年代に記録したテミル・コムズのサイズは6cmで、これは現在のaのテミル・コムズに当てはまる。

【写真3】テミル・コムズ属（2005年にケンチンバエフ・オロゾバイ製作）



【表３】2005年製作のテミル・コムズのサイズ

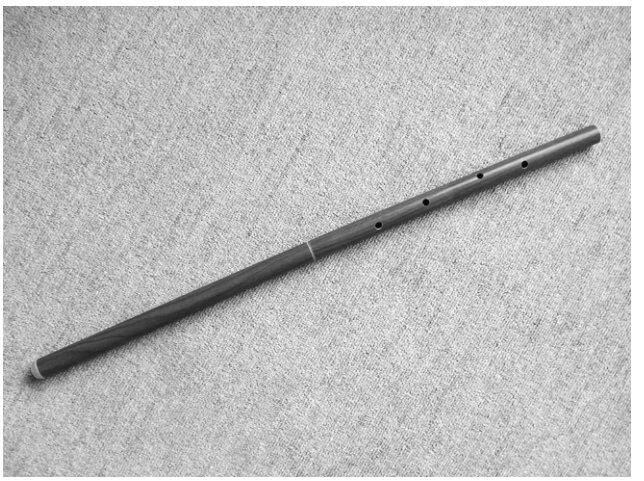
調律されたテミル・コムズの音名	楽器の長さ
c	7.5cm
d	7cm
e	6.5cm
f	6.4cm
g	6.2cm
a	6cm
b	5.7cm

(4)　チョール

2012年のインタビュー調査ではまた、チョール、チョポ・チョール、スブズグ、ドブルバシュ（dobulbash, добулбаш）などが改良されていることが明らかになった。その音楽もザタエヴィチが初めてクルグズで出会った音楽とは、かなり変わってきたのではないかと考えられる。興味深いことに、筆者もチョール、チョポ・チョール、スブズグ、ドブルバシュがソ連崩壊後に改良された楽器ということを知らず、昔から伝わってきている楽器と思っていた。したがって、一般のクルグズ人もそれらの楽器をクルグズの伝統的な楽器だと思っている可能性が高い。しかし、ソ連以前の楽器とソ連崩壊後に改良された楽器の差は大きい。

ヌシャノフ・ヌルランベック（Nyshanov Nurlanbek, Нышанов Нурланбек）（1966-）は横笛のスブズグ、チョールとチョポ・チョールの演奏家でもあり、製作者でもある。ソ連時代にこの三つの楽器は廃れてしまい、演奏家もほとんどいなかった。だが、今はクルグズであらゆるアンサンブルで演奏されているチョールは、ヌシャノフによって改良された楽器である。ヌシャノフのインタビューによると、彼が初めてチョールを作ったときには実物が無かったため、スバナリエフの本『キルギス民族楽器』[16]のチョールの記述に従い、楽器を製作したという。スバナリエフが記録したチョールは四つの指孔が空いており、楽器の長さは650～680mmである[17]。ヌシャノフはそのチョールの記述に基づいて改良型チョールを作ったと推測される。【写真４】はヌシャノフが改良したチョールで、長さ700mm、指孔は四つで、素材はプラスティックである。

【写真４】改良型チョール（2012年にナスリディノフ・アスルベック製作）



(5) チョポ・チョール

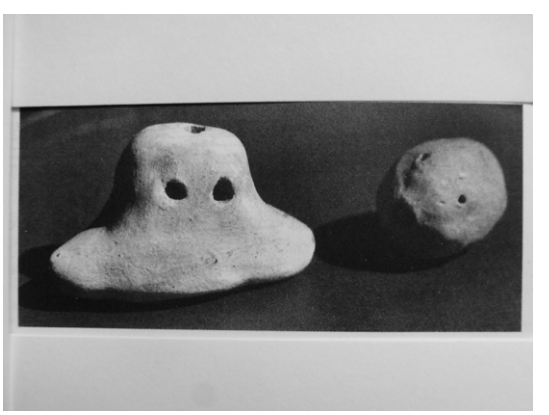
現在のチョポ・チョールは、指孔が８個あり、楽器の形状は細長くなっている。楽器の音もさまざまであり、【写真５】のチョポ・チョール属のうち、最も小さい形の楽器はピコロ・チョポ・チョールと呼ばれ、ａの音に調律されている。楽器の大きさにあわせて、チョポ・チョールの基本音が変わっており、左から順に、ｄ、ｆ♯、ｇ、ａ、ｃ♯^{1}、ａ^{1}である。ｆ♯とｃ♯^{1}は、意図的に♯の音で作られたのではなく、偶然その調律になった。実際、チョポ・チョールは、半音の音程差ならば演奏家自身が調節できる。筆者自身も、吹き口から最も近い四角い孔の上にチューイングガムを付けて、調律したことがある。現在、改良型チョポ・チョールは、アンサンブルで欠かせない楽器となっており、演奏されるレパートリーは西洋クラシックの曲からクルグズの伝統的な音楽に及ぶ。

ヌシャノフのチョポ・チョールとの出会いは、1987年にトクモク（Tokmok, Токмок）市で行われた音楽フェスティバルに参加したときであった。彼は、フェスティバルに参加していたバトケン州出身のサラモフ・カール（Salamov Kaar, Саламов Каар）という人と出会い、サラモフが自分で作ったチョポ・チョールを見た。このチョポ・チョールは小さく、指孔が４個の簡単なもので、短いキューを演奏することしかできなかったのである【写真７】。サラモフからチョポ・チョールの素材と作り方を教えてもらったヌシャノフは、家に帰ってチョポ・チョールの製作を始めた。彼はチョポ・チョールを作っていく中で、指孔を７個にし、その後フィルハーモニア楽器工房でアイドゥラリエフとさらに改良を重ね、指孔を８個にした。このようにしてさまざまな音のチョポ・チョール属が誕生した【写真５】【写真６】。

【写真５】改良型チョポ・チョール属（2010年にナシルディノフ・アスルベック（Nasirdinov Asylbek, Насирдинов Асылбек）製作）

【写真６】さらに改良されたチョポ・チョール（製作／撮影：ナスリディノフ・アスルベック、2008年製作、a^1に調律）

【写真７】伝統型チョポ・チョール[18]



(6)　スブズグ

初めにヌシャノフが出会ったスブズグは、木製で、指孔は６個であった。スブズグの改良は1983年から始まり、現在演奏されているスブズグの指孔は10個であり、音域はg^1–a^3である[19]。スブズグはさまざまな材料から作られており、例えば、プラスティック、真鍮、アンズの木である。楽器の構え方、吹き方と楽器のサイズは、ほぼ改良される前のスブズグと同じである。

【写真８】改良型スブズグ（製作／撮影：ナスリディノフ・アスルベック、製作年不明、プラスティック製）

ヌシャノフは「オルド・サフナ」(Ordo sakhna, Ордо Сахна)[20]というアンサンブルを経て、現在は「テンギル・トー」というクルグズで知られているアンサンブルの指導者および作曲家として活躍している。「テンギル・トー」は毎年数多くの国々に演奏旅行に出かけており、クルグズ共和国の代表的な役割を担っている。また、ラジオやテレビで頻繁に流されている音楽は「オルド・サフナ」や「テンギル・トー」の音楽であり、ヌシャノフとこの二つのアンサンブルの音楽が「コムズ・ブーム」に関係があるのではないかと考えられる。

また、現在ヌシャノフがこれらの楽器の教員でもあるため、楽器の演奏だけではなく、楽器の製作も教えている。【写真４】のチョール、【写真５】と【写真６】のチョポ・チョール、【写真８】のスブズグは、ヌシャノフの弟子であるナシルディノフ・アスルベックにより製作された楽器である。

(7)　ドブルバシュ

1987年に楽器製作者のケンチンバエフによって、バス、バリトン、テノル、アルトのドブルバシュ属が製作された。この楽器は民族楽器オーケストラ「ミン・クヤル」(Min kyyal, Миң кыял)、舞踊団「アク・マラル」(Ak maral, Ак марал)、クルグズ民族楽器アンサンブル「カンバルカン」(Kambarkan, Камбаркан）で演奏されている。楽器の胴は、カシの木、クルミの木、エゾマツの木で作られ、上に張っている革は調律できる構造になっている。この四つのドブルバシュは、台の上に立てられ、楽器のサイズは次の通りである[21]。

【写真９】ドブルバシュ属[22]

【表４】のドブルバシュ属のサイズ[23]

楽器名	調律	長さ	革の直径	胴の直径
ドブルバシュ・バス	A	65cm	44cm	139cm
ドブルバシュ・バリトン	g	50cm	30cm	95cm
ドブルバシュ・テノル	c ¹	42cm	25cm	78cm
ドブルバシュ・アルト	f ¹	35cm	20cm	63cm

結論

以上本論文では、楽器職人や演奏家へのインタビュー調査を通して、ソ連設立以前の時期から現在に至るまでクルグズの音楽と楽器の変遷を考察した。その結果、ソ連時代に大幅に変化してきたものもあれば、近年ふたたび復興され、改良されたものもあることを明らかにした。

本論文ではソ連時代だけでなく、ソ連崩壊後から現在に至るまでコムズが変化し続けていることが分かった。まず、楽器の音量を上げるため、伝統型コムズの形状は大きくなっている。またコムズを１本の木からくり貫いて作る方法は、コムズの注文が増えてきている今の時代に合わなくなり、クラマ・コムズも誕生している。また、ソ連時代に廃れ、演奏されなくなっていたクル・クヤク、チョール、チョポ・チョール、スブズグ、ドブルバシュが楽器製作者と演奏家によって復興された。なぜならばソ連崩壊後にはクルグズ人の民族意識が高揚したため、ソ連時代にアンサンブルやオーケストラで用いられてきた西洋楽器を、クルグズ民族楽器に置き換えることが必要となったからである。さらにそれらの楽器は、ソ連崩壊後、西洋音楽を演奏しやすい形状へと改良がなされ、テミル・コムズ属、チョポ・チョール

属、ドブルバシュ属が誕生した。12平均律を演奏しやすいように改良するというアプローチは、ソ連時代と同じではないかと考えられる。

クルグズ伝統楽器の復興は、1980年代から始まっていたと考えられる。1981年にチティルバエフがクル・クヤクと出会い、その楽器を習うためにクル・クヤクの演奏家を探し始めること、1983年にヌシャノフがスブズグを作り始めること、1987年にヌシャノフがチョポ・チョールと出会ったこと、同じ1987年に楽器製作者のケンチンバエフによってドブルバシュ属が復元されたことなど、これらの出来事は1980年代に集中している。さらに、長年に渡って演奏されてきた改良型コムズ[24]も、1988年にオロゾフ・クルグズ民族楽器オーケストラ[25]を初め音楽教育機関から姿を消していった[26]。1980年代は、自国の伝統文化と音楽に目覚め始めた時代であり、今日コムズが人気を集める土台になっていたと思われる。1990年代はソ連崩壊後の時代であり、経済的、社会的な問題が深刻だったためか、音楽関係の大きな動きはあまり見られなかった。しかし2000年代は、再び民族文化再興の動きが活発化していると言えるだろう。復興の理由として、2003年にアクンの技芸[27]が、2013年に「マナス」叙事詩[28]がユネスコ無形文化遺産に登録されたことが大きな励みとなっただろう。クルグズにとって無形文化遺産登録は初めての出来事であり、自国の伝統文化の魅力に気づかせる機会になったと思われる。

また、楽器の復活・普及の一つの要因として、ソ連時代と比べて、クルグズの音楽家が外国で演奏できる機会が圧倒的に多くなってきたことが挙げられる。外国で演奏するチャンスを作ることは、自身の国で有名になるための近道であり、自国よりも、外国の方が多く利益を上げられるようになった。このような現象は伝統音楽と楽器の商品化に結びつき、民族音楽の普及に繋がったに違いない。

ソ連崩壊以後、中央アジア諸国はそれぞれの方向を歩みながら、自民族の音楽・文化・伝統の復興を試みている。だがクルグズのように、楽器を国のシンボルにして、民族共同体を再認識している国はそこまで多くないだろう。その裏づけとしては、紙幣の表面にコムズとクル・クヤクが描かれていることが考えられる【写真10】。なぜならば、かつて遊牧民であったクルグズ人は建物などを残していないため、日常生活で求められた数少ない物のうち、楽器が文化の代表的な役割を担ってきたからである。皮肉なことに、この紙幣の背景にはソ連時代に建てられたクルグズ国立フィルハーモニアと、当時改良されたクル・クヤクが描かれ、一般の人にはこの楽器が「クルグズの伝統楽器」と思われていると考えられる。

2005年と2010年にクルグズ共和国では市民革命が起こった。中央アジア諸国の中で市民革命が起こったのはクルグズ共和国のみである。現在、経済が悪化して失業率が高くなっているため、クルグズ在住のロシア人、ドイツ人、ウズベク人のみならず、クルグズ人も外国に移住する人が多くなっている。さまざまな政治的、社会的、経済的な問題に直面しているクルグズの人々にとって、コムズをはじめとする民族楽器はただ単に楽器ではなく、民族を団

【図10】クルグズの紙幣、１ソム（som, сом）

結させる力を持っていると考えられる。

参考文献

ロシア語

・Академия наук Киргизской ССР, *История киргизского искусства*, Фрунзе: Илим, 1971.

・Вертков К., Благодатов Г., Язовицкая Э. *Атлас музыкальных инструментов народов СССР*. Москва: Музыка, 1975.

・Виноградов В., “А. В. Затаевич и киргизская народная музыка,” in *Киргизские инструментальные пьесы и напевы*, edited by Затаевич А.В. Москва: Советский композитор, 1971.

・Гусев, Владимир. *Кыргызские музыкальные инструменты*. Бишкек: Фонд Сорос-Кыргызстан, 2002.

・Дюшалиев, К Лузанова Е. *Кыргызское народное музыкальное творчество*. Бишкек: Фонд Сорос-Кыргызстан, 1999.

・Затаевич, Александр. *Киргизские инструментальные пьесы и напевы*. Москва: Советский композитор, 1971.

・Затаевич, Александр. *250 киргизских инструментальных пьес и напевов*. Москва: Государственное музыкальное издательство, 1934.

・Субаналиев, Сагыналы. *Традиционная инструментальная музыка и инструментарий кыргызов*. Бишкек: Учкун, 2003.

・Субаналиев, Сагыналы. *Киргизские музыкальные инструменты*. Фрунзе: Кыргызстан, 1986.

クルグズ語

・Алагушев, Балбай. *Кыргыз улуттук Филармониясы*. Бишкек: Бийиктик, 2006.

・Томотоев Төлөгөн. *Комузда аккорддук үндөрдүн жайгашуу таблицасы*. Бишкек: Кербез, 2008.

日本語

・小松久男、宇山智彦、堀川徹、梅村坦『中央ユーラシアを知る事典』東京：平凡社、2005。

Webサイト

・*Traditional knowledge*, “Уралиев Намазбек. Наставление моих предков-идти с комузом по жизни,” accessed on September 1, 2013,
http://traditionalknowledge.org/?page_id＝4999&lang＝ru.

・*丸三ハシモト株式会社*, “商品情報,” accessed on September 9, 2013,
http://www.marusan-hashimoto.com/products/lineup.html.

注

1　日本で使われている「キルギス」という名称はソ連時代に用いられたロシア語の発音によるものである。現地の発音に最も近い名称はクルグズ（Kyrgyz, Кыргыз）であり、憲法上は「クルグズ共和国」である。クルグズスタン（Kyrgyzystan, Кыргызстан）は一般的に使用されている名称である。本論文では、クルグズという語を使用する。なお、ソ連時代に出版された文献で、題名にロシア語で「Kirgiz, Киргиз」と書かれている場合は、日本語でも「キルギス」と訳す。

2　ユダヤ系ロシア人のザタエヴィチ・アレクサンドル・ヴィクトロヴィチ（Zataevich Aleksandr Viktorovich, Затаевич Александр Викторович）（1869-1936）は、伝統音楽の研究者の「父」とも言われ、中央アジアのカザフや、クルグズ、ウイグル、ウズベク、モンゴル、ドゥンガン等、そして、シベリアに住んでいる少数民族、ブリャット、ヤクットの民謡や器楽曲を採譜し、楽器について記述を残した。彼によって採譜されたものは全部で2600曲あると言われている。ザタエヴィチは、教育機関を通した音楽教育を受けておらず、兵役ギムナジウムを卒業後、役人として働いた。子供のころから音楽に興味を持ち、プライベート・レッスンと独学で音楽の勉強をしており、12歳のとき、ピアノのための作品を作曲したこともあった。ザタエヴィチが民族音楽に興味を持ったのは、51歳のころからであった。それ以前は、彼はポーランドの首都ワルシャワに住んでいたが、1914～18年に第１次世界大戦が起こったとき、戦火から逃げるためにモスクワへ、その後ペトログラードへと移り、51歳になった1920年にオレンブルグ（当時カザフスタンとクルグズの首都）に移住し、初めてカザフとクルグズの伝統的な音楽と出会った。（Виноградов В., “А. В. Затаевич и киргизская народная музыка,” in *Киргизские инструментальные пьесы и непевы*, edited by Затаевич А. В. (Москва: Советский композитор, 1971), pp. 3-4.）

3　Виноградов В., “А. В. Затаевич и киргизская народная музыка,” in *Киргизские инструментальные пьесы и напевы*, edited by Затаевич А. В. (Москва: Советский композитор, 1971), p. 10.

4　ここで用いている「改良」という言葉は、「改良された」というロシア語の形容詞レコンストル

イロヴァヌイ（rekonstruirovanyi, реконструированный）に由来する。ソ連時代の人々にとってこの言葉は、ただ楽器を変化させることではなく、より良くすることを意味した。また、当時はアンサンブル演奏と西洋クラシックの曲が演奏できることは良いことであるという価値観があったため、筆者もこの論文では реконструированный を「改良された、改良型」と訳す。

5　テンギル・トー（Tengir too, Тенир too）2004年に設立されたクルグズ民族音楽演劇団で、メンバーは約15名である。

6　Виноградов, *Киргизская народная музыка*, p. 5.

7　Виноградов, *op. cit.* p. 163.

8　クルグズ語で「白い鳥、青い鳥」を意味する。

9　Затаевич Александр, *250 киргизских инструментальных пьес и напевов* (Москва: Государственное музыкальное издательство, 1934), p. 9.

10　アクン（akyn）とはコムズを弾きながら即興的に歌い、語り、話芸を行う芸能者を意味し、そこには詩人、歌手、器楽奏者、作曲家などの概念すべてが包含される。さらに先行研究者によれば、ソ連設立以前のアクンは社会体制を批判する啓蒙的な存在で、民族文化の中心であったという。（Виноградов В., "А. В. Затаевич и киргизская народная музыка," in *Киргизские инструментальные пьесы и напевы*, edited by Затаевич А. В. (Москва: Советский композитор, 1971), p. 20.)

11　Gusev, Kyrgyz Musical Instruments, (Bishkek: Soros Foundation Kyrgyzstan, 2002). p. 7.

12　*Traditional knowledge*, "Уралиев Намазбек. Наставление моих предков- идти с комузом по жизни," accessed on September 1, 2013, http://traditionalknowledge.org/?page_id＝4999&lang＝ru.

13　Затаевич, *250 киргизских инструментальных пьес и напевов*, p. 10.

14　Gusev, *op. cit.*, p. 9.

15　Затаевич, *250 киргизских инструментальных пьес и напевов*, p. 10.

16　Субаналиев Сагыналы, *Киргизские музыкальные инструменты* (Фрунзе: Кыргызстан, 1986), p. 103.

17　Субаналиев Сагыналы, *op. cit.*, p. 103.

18　Дюшалиев Камчыбек, Лузанова Екатерина, *Кыргызское народное музыкальное творчество* (Бишкек: Фонд«Сорос-Кыргызстан», 1999), p. 156.

19　Дюшалиев, Лузанова, *op. cit.*, pp. 157-158.

20　オルド・サフナ（Ordo sakhna, Ордо Сахна）は1999年に設立されたクルグズ民族音楽演劇団で、メンバーは約10名。演奏されている楽器：コムズ、クル・クヤク、改良型クル・クヤク、テミル・コムズ、ジガーチ・オーズ・コムズ、改良型チョール、改良型チョポ・チョール、改良型スブズグ、スルナイ、ケルネイ、ドブルバス、ドール、コングロー、体鳴楽器。

21　Ibid., pp. 161-162.

22　Дюшалиев, Лузанова, *op. cit.*, p. 162.

23　Ibid., p. 162.

24 改良型コムズ（реконструированный комуз）。コムズは1930年代と1950年代改良された。クルグズが社会主義化した1936年に12平均律を演奏しやすいようにコムズにフレットが付けられた。そして音楽教育機関や、アンサンブルやオーケストラで用いられ、西洋芸術音楽の演奏用に調弦も変えられた。

25 オロゾフ・クルグズ民族楽器オーケストラ（Академический оркестр Кыргызских народных инструментов им. К. Орозова）。1936年にクルグズ国立フィルハーモニアが設立され、同年にフィルハーモニアに所属するクルグズ民族楽器オーケストラが組織された。（Алагушов Балбай. *Кыргыз улуттук филармониясы*. (Бишкек: Бийиктик, 2006) p. 6.）1961年にオロゾフ・カラモルド（Orozov Karamoldo, Орозов Карамолдо）（1883-1960）というコムズ奏者の名前にちなみ、オロゾフ・クルグズ民族楽器オーケストラと名付けられた。（Академия наук Киргизской ССР, *История киргизского искусства* (Фрунзе: Илим, 1971), p. 256.）

26 Томотоев Төлөгөн. *Комузда аккорддук үндөрдүн жайгашуу таблицасы*. (Бишкек: Кербез, 2008), pp. 3-4.

27 アクン技芸には、二つのジャンルがあり、一人のアクンが独奏演奏するジャンルと、二人以上のアクンで行われるジャンルとがある。後者はアイトゥシュ（aitysh, айтыш）と呼ばれ、二人以上のアクンの間で行われる言葉の戦いである。誰が一番聴衆を笑わせることができるかの勝負であり、アクンの音楽と言葉使いの実力や技術が現われる場である。かつてこのような音楽のジャンルは、カザフスタンとクルグズで人気があったが、ソ連現代では時代錯誤的なものになってしまった。

28 「マナス」（Manas, Манас）叙事詩。クルグズに語り伝わる英雄叙事詩。中央アジアを代表する叙事詩の一つとして、世界的にもよく知られている。（小松久男、宇山智彦、堀川徹、梅村坦『中央ユーラシアを知る事典』東京：平凡社、2005、p. 483.）

The Modernization of Kyrgyz Instruments: From the Soviet Era to the Present

UMETBAEVA Kalyiman

The aim of this thesis is to make a comparative study of the, at present, commonly performed *komuz* and the past *komuz* that Zataevich Aleksandr (1869-1936) described in his research, while also examining the transitions and changes this instrument underwent. This research is based off of interviews conducted in Bishkek, Kyrgyz with Aidyraliev Suragan (1956-), a craftsman of *komuz*, from 2011 to 2015 and indicates that traditional instruments have been used to create a unified identity among the Kyrgyz people in order to overcome cultural changes during the reign and after the fall of the Soviet Union.

Zataevich Aleksandr is the first person that studied the music and instruments of Kyrgyz in 1928. In his research he stated that there were only three instruments in Kyrgyz; *komuz, kyl kyyak* and *temir komuz*. He also indicated that the other traditional instruments in Kyrgyz were not native to this country but instead introduced by neighboring ethnic groups. Today there are less than ten traditional instruments that are still played, and some of these instruments have been revived or modernized since the Soviet era (1917-1991) causing radical changes to the musical tradition in Kyrgyz.

From interviews with Aidyraliev Suragan, it is clear that by the end of the Soviet era Aidyraliev had revived and modernized a *choor* (pipe), *chopo choor* (ocarina) and *sybyzgy* (flute), as well as devised a *komuz* that could be separated into pieces which is still commonly used today. These instruments are now used as "new cultural objects" that represent the people of Kyrgyz today in both domestic and foreign performances as well as in the music educational curriculum of Kyrgyz.

In conclusion, I examine the revival and modernization of instruments which were once disused before and after the collapse of the Soviet Union. I reveal that these instruments became an essential tool in Kyrgyz in order to overcome hard times that the people faced after two revolutions within the same decade.